リレーエッセイ

ハードルを越えて 47

永井 湧育（ながい ゆうすけ）さん
（鹿児島市）

私が陸上を始めたのは小学3年生のときです。3つ上の兄が陸上をしていて、その練習についていくうちに「自分もやってみたい」と思ったのがきっかけでした。兄は足が速く、憧れの存在でした。私は進行性の視覚障害があるため、暗い場所や天候によって見えづらくなることがあります。周囲の理解に支えられながら小学校から高校まで競技を続けてきましたが、足や腰のけがで走ることが楽しくなくなり、高校で一度陸上から離れました。

再び競技を始めるきっかけになったのは、高校卒業後、国家資格取得のため入学した鹿児島盲学校で「全国障害者スポーツ大会」への出場を勧められたからです。2023年のかごしま大会への出場を目標に掲げ、練習に取り組みました。大会では大勢の観客を前にとても緊張しましたが、地元の方々の声援が大きな力になり、200mで銀メダル、100mで銅メダルを獲得できました。加えて、仲間との練習の楽しさを再確認し、「やっぱり走るのは楽しい。陸上にもう一度挑戦したい」と思えたことも大きな収穫になりました。

2025年の滋賀大会には、「次こそは金メダルを」という想いで臨みました。大会までの間、選手団の練習だけでなく、視覚障害者の陸上チームにも参加し、目標タイムを設定して練習するなど努力を重ねました。その結果、大会では50mと200mの両方で金メダルを取ることができました。結果には自分でも驚きましたが、努力が形になって本当に嬉しかったです。2026年は学生最後の年なので、もう一度全国大会に挑戦したいと思っています。

今後の目標は、競技を通して学んだ体のケアの大切さを伝えられるように、はり師の国家資格を取得することです。はり師として、治療だけでなく患者さんとのコミュニケーションを重視し、精神的な面でも支えになりたいです。将来的には、会社で働く方たちのヘルスケアに従事できる“ヘルスキーパー”の仕事も視野に入れながら、これからも自分にできることに挑戦し続けたいです。

かごしま大会で走っているときの会場の声援があたたかく、とても嬉しかったです。

【ヘルスキーパーについて】

ヘルスキーパーとは、あん摩マッサージ指圧師などの国家資格を持つ視覚障害者が、企業内で従業員の健康管理を担う職種です。従来は病院や高齢者施設での勤務が中心でしたが、近年は一般企業でも導入が広がりつつあります。現在、鹿児島県内では5つの企業でヘルスキーパーが雇用されています。また、鹿児島盲学校では、学生を企業に派遣し、20分程度の体験施術を行う実習に取り組んでおり、技術力の向上や、企業の視覚障害者への理解促進を図っています。

ヘルスキーパーとして、KTS鹿児島テレビに勤務する奥田寛さん。心と体を癒してくれる存在として会社内で重宝されています。